

天正十四年四月十日、秀吉はいよいよ九州出兵の計画を明らかにし、毛利輝元・小早川隆景・吉川元春らに對して、黒田官兵衛孝高を西下させることを告げ、豊前・肥前の国人たちから人質をとり、門司・麻生・山鹿・宗像など、秀吉の通路ぞいの城々へ兵や糧食を込め、「丈夫」にしておくよう指示した。

島津軍の北上と 天正十四年六月、島津義久は肥後八代に出
上方勢の渡海 張し、島津忠長や伊集院忠棟を筑後高良山

に布陣させ、翌七月、筑前に進撃して、筑紫広門の五箇山城を降し、高橋紹運じょううんの籠もる太宰府の岩屋城を五万の大軍で包囲し、同月二十七日、総攻撃して、紹運ら五〇〇人余を全滅させた。

黒田官兵衛・宮木宗賦・安国寺惠瓊らは、七月二十五日、京都

を出発し、一〇日余で小倉へ渡り、九月に、立花城へ入った。岩屋城にあった高橋氏の救援は間に合わなかった。上方勢の渡海を知った島津勢は、八月二十三日の夜、立花城の包囲を解き撤退した。立花統虎むねとらは、島津勢を追撃し、高鳥井城・宝満岳城・岩屋城をつぎつぎと奪回した。

筑前より島津勢を駆逐した秀吉は、豊前の島津与同者の一掃を目指した。天正十四年十月三日以前に、黒田・宮木・安国寺に指示して、豊前西部四郡の制圧にかからせ、大友義統よしみち・長宗我部元親(他)・千石権兵衛に



黒田孝高の花押



高橋鎮種入道紹運の花押



立花統虎の花押

は豊前東部四郡制圧のために、宇佐郡妙見岳城・龍王城へ陣を移させた。これより前の七月二十日に、長宗我部・仙石ら四国勢を豊後へ渡海させ、島津軍の豊後進入に備えさせていた。

豊後勢は十日足らずで、豊前東部を平定し、しばらく滞在した。

島津軍の豊後占領

大友義統と四国勢が豊前に出張している留守中に、豊後南郡衆が島津軍を案内して、破竹の勢いをもって府内へ向か

って進撃してきた。

急を聞いて、義統と四国勢は府内へ帰り、その地に七しち八はちの地点まで追って

きた島津軍を討つべく、十二月十三日、戸次へ出陣した。しかし、若い仙石権兵衛秀久の作戦が失敗して、長宗我部元親の子息信親二十二歳が戦死するという敗北を喫して、府内へ撤退した。

島津の大軍の怒濤の攻撃を前に、府内の維持は困難と見た大友義統は、高崎山城にとどまることもせず、再び竜王城へ移った。このことが、のちに所領没収の理由の一つになった。仙石秀久も妙見岳城に入り、秀吉の下向を待つことになった。子息を失った長宗我部元親は船で日振島へ難を避けた。竜王城は、宇佐郡の武士の棟梁であった宇佐大宮司一族安心院氏の居城であったが、天正十一年（一五八三）、安心院麟生が反逆して滅ぼされ、大友氏がその跡を直轄していた。

このあと、秀吉は、豊前移陣を命じておきながら、仙石秀久が、去る七月十二日の「彼是の人数待請候程は、聊爾の働これ無き様」とか、八月二十五日の「たとえ、かの悪党、合戦を挑み申し候とも、かまひなく



仙石秀久の花押

堅固の覚悟これあるべく候」という秀吉の命令に背いて、持ち場を離れて豊前に移り、そのために、島津軍の進入を招いた責任を追及して仙石秀久に与えていた讃岐一国の知行を没収してしまった。関白殿下の軍が島津軍に敗れたという恥辱を、仙石権兵衛一人の責任に転嫁して、殿下の面目を保ち、秀吉の家臣たちへのみせしめとした。

黒田官兵衛・小早川隆景が渡海し、小倉城を包囲すると、十月四日、城主（城代）は降を乞うて赦され、高橋元種も降伏を打診してきたが、折り合わなかつたらしい（『吉川文書』『豊公遺文』）。

二 上方勢の豊前諸城の攻略

黒田孝高の 天正十四年（一五八六）十月十日以前に、まず長野統重が秋月氏と手を切つて京方に寝返り、**馬ヶ岳入城** 人質を出し、馬ヶ岳へ上方勢を入れることに同意した。続いて、山田・中八屋・広津鎮種・時枝鎮継・宮成吉左衛門らが、ぞくぞくと人質を差し出してきた。ただちに、中国勢をこれらの城々へ送りこんだ。彼らは長年、毛利氏と昵懇じっこんの關係にあり、竜造寺氏が寝返り、島津軍が退去した段階で、上方勢に抵抗することの無駄を悟つたのである。秀吉は彼らには当知行とうぎょうを安堵した（『時枝文書』）。

宇留津城潰滅

十一月七日、中国勢は宇留津城を包囲し、「即時に切崩し」、城將加来孫兵衛以下千余人を討ち滅ぼした（第1図参照）。男女残らず「はた物」にかけられ、秀吉は「心知よき次第に候」と黒田ら中国勢へ書き送っている。